

九所明神と灯籠

九所明神は神社ですが、仏教寺院の境内に建てられています。日本の歴史において、1868年に政府が仏教と神道を公式に分離する命令を発するまで千年以上にわたり、この2つの宗教は互いに密接な関係にありました。しかし、政府による分離は絶対的なものではなく、今でも九所明神と仁和寺の関係と同様に、仏教寺院の守護神として、境内に神社が建てられている例が多くみられます。

九所明神を構成する3棟の建物には、本殿に1柱、そして、本殿に隣接する2棟の拝殿（左右殿）に4柱ずつ、合計9柱の神が祀られています。これらの神々は、いずれも京都各地の主要な神社に祀られていたものが、仁和寺と深い関係にあった朝廷の安泰と繁栄を願って仁和寺に集められたものと考えられています。九所明神の本殿には皇室の先祖であり、武士の守護神である八幡神が祀られています。

本殿の前にある3基の石灯籠は、現在の社殿が完成した1644年に作られたものです。これらの石灯籠は、茶人であり灯籠師でもあった古田織部（1544～1615）の名を冠した織部灯籠という様式のもので、台座上部の丸みを帯びた形状と上部に冠されたこぶのような宝珠が特徴的です。